

Title	慶應義塾入門帳の最初の記名者
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5) ,p.198(296)- 199(297)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録 慶應義塾史研究特輯
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0198">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0198</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

合計	不明	和蘭	英國	鹿兒島	熊本	大分	宮崎	長崎	佐賀
28	1			3					
29				1		2			1
18					1			3	
13								1	
15	1								
19	1			2		1			
42				3	1	1		1	
46	1			4	1				
53	5			3		3		3	
73	3			6	1	2			
71	2			2		4	1		
71				6		1		2	1
108			1	6		4			1
133	3		2	3		1		1	
90				1			1		2
104				3		1		1	3
90				4		1		2	2
71	1			6					2
69				2		1			1
55	5				1	1			1
67		1		1	1			1	
114				1	1				1
113	1			1					
94					1				
1586	24	1	3	58	8	23	2	15	15

慶應義塾入門帳の最初の記名者

昭和十四年三月三十一日刊行の「第一高等學校六十年史」口繪に歴代校長の寫眞が出ていて、そこに小林小太郎というのがある。髮を左から七三に分け、蝶ネクタイを結んだ瀟灑な青年である。

小林が同校の校長になつたのは、同校がまだ東京大學豫備門と呼ばれていた時代のことと、改めていうまでもなく、一高は東京英語學校——明治七年十二月二十七日東京外國語學校のうちの英語科を分離して設けられたものに淵源し、それが明治十年四月十二日、それまでの文部省直轄から東京大學に附屬することとなつて、東京大學豫備門と改稱された。小林はこの豫備

門時代、同豫備門長杉浦重剛のあとをつぎ、明治十八年十二月一日から同二十八日まで文部権大書記官として同長事務取扱を兼ねたのであつた。そのことは右書附表（幹部表）にもみえ、また本文の同日附記事にはこうある。

明治十八年十二月一日 豫備門長杉浦重剛非職となり、文部権大書記官小林小太郎豫備門長事務取扱を兼勤す。（九〇頁）

明治十八年十二月二十八日 ついで、文部権少書記官野村彦四郎代つて豫備門長心得を命ぜられたり。（同頁）

ところで、慶應義塾に保存されている最初の入門帳「姓名録一」なるものをみると、實にその第一頁に「小林小太郎」という名が出ており、このことは既に「福澤諭吉傳」にも「義塾最初の姓名録を見ると、文久三年春入門として小林小太郎の名が第一頁に載つてゐる。これを入塾の筆頭として、云々」（第一卷、四三一頁）と書かれている。塾の創設は安政五年なのであるが、これ以前には別に入門帳というようなものもなかつたのであろう。

そして、さらに右福澤傳には、大正十五年物故された最古参の塾員の一人、文久元年五月（入門帳では文久三年四月）新錢座入塾の小幡彌（舊名杏平）の談話により、當時の模様が「其時には小幡の叔父に當る野本三太郎が同居して居り、松山藩の小林小太郎（後文部省に出仕）などが通學してゐたことを覚えてゐる云々」（第一卷、三〇二頁）とも述べられている。これ

は塾が芝新錢座にあつたころのこと、小林の入塾した年の秋ごろ塾は再び創設地の鐵砲洲に移轉し、翌年福澤先生は小幡篤次郎以下六人の俊秀を故郷から伴い歸られるが、その以前そこに在塾していたものとして、同書（第一卷、四三〇頁）はまた、前記小幡彌等の他、伊豫松山の小林小太郎、仙臺の横尾東作、雲州松江の北尾高德、飯塚納等の名をあげ、他藩人四五人、合せて塾生約二三十人くらいであつたともいう。

即ち、小林小太郎は伊豫松山の出身で文久三年春の入門、入門帳には「松平隱岐守内」と記載され、新錢座及び鐵砲洲の塾に學んだ。卒業の制度は、そのころまだなかつたけれども、後に明治七年、それがきまつてから、それ以前の在塾者で凡そ四ヶ年在學し當時後進の生徒を誘拔したものを一應卒業生と見做した折、そのなかに加えられ、「卒業生名簿」にそう載つてゐる。卒業後、文部省に出仕して、そのうちに権大書記官として一ヶ月足らずの間臨時に豫備門長事務取扱を兼務したものであつた。

なお、序でに記しておく、小林のあとに校長となつた野村彦四郎も、一高が東京英語學校として發足した當初の校長肥田昭作も、これが豫備門となつて以後三年ほど主幹を勤めた濱尾新も、共に塾に學んだ人々なのであつた。往時の教育界に於ける慶應義塾の指導的役割が、この一例を以てしてもしのべようか。

（會田倉吉）